

武蔵野日曜集会

神の羔

——ヨハネ伝第1章19～34節——

1994年2月20日

小池辰雄

ヨハネの証^{あかし} 荒野に呼ばれる者の声 先駆者 パウロの回身 無即無限無量 神の羔羊^{こひつじ} 十字
 架・聖霊の現実 神交 羔の怒

【ヨハネ1・19～34】

19 さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣^{つかわ}して『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。20 すなわち言いあらわして諱^いまず『我はキリストにあらず』と言いあらわせり。21 また問う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答う『いな』22 ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣しし人々に答え得るように為よ、なんじ己につきて何と言うか』23 答えて言う『我は預言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼ばれる者の声」なり』24 かの遣されたる者は、パリサイ人^{びと}なりき。25 また問いて言う『なんじ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故バプテスマを施すか』26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』28 これらの事は、ヨハネのバプテスマを施しいたりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。

29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。30 われかつて「わが後に來たる人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といひ給えり。34 われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』



●ヨハネの証あかし

19 さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。

「ユダヤ人」というのは衆議所、サンヘドリンの議員の一人です。「ヨハネ」というのは洗礼のヨハネのこと。キリストの先ぶれの預言者ですから、なかなか勇敢にやっていた。預言者といえば最後の預言者になるわけです。その衆議所のユダヤ人が洗礼のヨハネの運動のうわさを聞いたものですから、「祭司とレビ人」が出かけて来たわけです。レビ人ももちろん祭司の仲間ですけれども、「祭司とレビ人」というときには、レビ人は祭司の補助者であるわけです。レビの族というのははもともと祭司の族ですから。

20 すなわち言いあらわして諱まず『我はキリストにあらず』と言いあらわせり。

このユダヤ人はキリストの出現をうわさに聞いて待っていたわけです。だから、ヨハネは「私はキリストではない」と、誤解されてはいけなからはずきり言った。

21 また問う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答う『いな』

「キリストの先駆者としての預言者か」と、古い預言者の名前をあげて——エレミヤの名も多分言われたでしょうね——エリヤかと。「そうじゃない」と。「かの預言者」とは、申命記18章15節に、

「15 汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一箇の預言者を汝のために興したまわん。汝ら之に聴くことをすべし。……18 我かれら兄弟の中より汝のごとき一箇の預言者を彼らのために興し我言をその口に授けん。我が彼に命ずる言を彼のごごとく彼らに告ぐべし。19 凡て彼が吾名をもて語るころの吾言に聴したがわざる者は我これを罰せん。20 但し預言者もし我が語れと命ぜざる言を吾名をもて縦肆に語りまたは他の神々の名をもて語ることを為すならばその預言者は殺さるべし。」(申命記18・15～20)

と、申命記に既にそういう預言者がある。申命記18章15節に言われている「かの預言者であるか」と。「いや、そうじゃない」「では、何だ」と。

22 ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣しし人々に答え得るようにならば、なんじ己につきて何と言うか』23 答えて言う『我は預言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼ばれる者の声」なり』

●荒野に呼ばれる者の声

これはイザヤ書40章3節にある。

「3 よばわるものの声きこゆ云く、なんじら野にてエホバの途をそなえ、沙漠にわれらの神の大路をなおくせよと。4 もろもろの谷はたかく、もろもろの山



と岡とはひくくせられ、曲りたるはなおく、崎嶇はたいらかにせらるべし。
 5 斯てエホバの栄光あらわれ人みな共にこれを見ん。こはエホバの口より語りたまえるなり。

6 声きこゆ云く、よばわれ。答えていう何とよばわるべきか、いわく人はみな草なり。その栄華はすべて野の花のごとし。7 草はかれ花はしぼむ。エホバの息そのうえに吹ければなり。

これは審判の意味ですね。

実に民はくきなり。8 草はかれ花はしぼむ。されどわれらの神のごとは永遠にたたん。

キリスト——「ロゴス・キリスト」——はヨハネ伝で擬人的に「神の言」と言われた。だからこの「神のごとは永遠にたたん」とは、隠れた意味ではキリストのことです。9 節から11節まではまるでキリストのことを語っているようです。

9 よき音信をシオンにつたうる者よ、なんじ高山にのぼれ。嘉おとずれをエルサレムにつたうる者よ、なんじ強く声をあげよ。声を揚げておそるるなかれ。ユダのもろもろの邑につげよ、なんじらの神きたり給えりと。10 みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。賞賜はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。11 主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわらかに導きたまわん。

12 節から17 節までは素晴らしい言葉だね。

12 たれか掌心をもてもろもろの水をはかり、指をのぼして天をはかり、また地の塵を量器にもり、天秤をもてもろもろの山をはかり、権衡をもてもろもろの岡をはかりしや。13 誰かエホバの霊をみちびき、その義士となりて教えしや。14 エホバは誰とともに議りたまいしや。たれかエホバを聴くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたえ、明通のみちを示したりしや。15 視よもろもろの国民は桶のひとしづくのごとく、権衡のちりのごとくに思いたもう。島々はたちのぼる塵埃のごとし。16 レバノンには柴にたらず、そのなかの獣は燔祭にたらず。17 エホバの前にはもろもろの国民はみななきにひとし。エホバはかれらを無ものごとく空しきものごとく思いたもう。」(イザヤ40・3)

●先駆者

神無き世界はダメだ、いわゆる民主主義はダメだというわけですが、神、民主主義でないから、神が主になっていないから。神主でないあけつぱなしの民主主義なんてものはダメだという事です。アブラハム・リンカーンは、



「アメリカの政治は神の下における（アンダー・ゴッド）民の民による民のためのものである」

と言った。これはゲチスバークの有名な三分間演説の中の言葉です。

洗礼のヨハネが即ち、預言者イザヤがイザヤ書40章3節で言っているところの者のように、

「主の道をなおくして荒野に呼ばれる声」

であるということでした。

先駆者という者は非常に軽く見られるけれども、実は非常に大事なんです。パウロの先駆者はステパノです。ステパノを無視してパウロを思うわけにはいかない。マルチン・ルター
の先駆者はヨハネス・フスだ。ボリビアの人です。

預言者や詩人は大体、聖書をみても第一級の人です。説明する人間は第二流以下。第一流の人は創造的な人物です。学者というのは第二流なんだ。これはゲーテが『ファウスト』の始めの方で既に言っている。いわゆる学者というのは大したことはない、大事なのは創造的のものを言う人だと。解説、説明は第二義的なもの。上から示されて告白するのが第一義的です。

だから、先駆者というのは大事なんです。ステパノ、洗礼のヨハネ。モーセはもちろんヨシユアよりも上です。あと、偉大な預言者たち。アモス、ホセア、十二小預言者。小預言者といつても、あれは書いたものが小さいので、人物が小さいという意味ではない。イザヤ、エレミヤなんてのは大変な人物ですな、特に第二イザヤは。

「預言」というのは「予言」ではない。神さまから御言を預かって皆に告げることです。だから、キリストは最大の預言者です。神さまの言を預かってものを言っている。

「われ何事をも言う能わず。何事をも為し能わず」

と、キリストが言っているんだから。

「自分は無能者なんだ。ただ神さまが言えといっていることを言っているだけのはなしだ。神さまが為せということのを為さしめられているだけだ」

と。天来の力に圧倒されて動いているひと、それがキリストです。

「われ何事をも為し能わず。また、教えているのでもない。わが教はわが言に

あらず、父の言だ」

と言っている。

●パウロの回身

24 かの遣わされたる者は、パリサイ人なりき。

「パリサイ人」というのは宗教界の実権をにぎった者たちで、自分たちは一番義人だと自ら認じているご連中です。パリサイ根性というのは他を見下している。自己義認者がパリ



サイです。「パリサイ」という言葉は

「分かたれた者、他の者とは区別されたもの」

という優越感をもった言葉なんです。ユダヤ人はパリサイ根性だから自分たちを「選民」と言っているでしょ。ところが、

「本当の選民はユダヤ人ではない。本当の選び人はかえって名もない人たちの中にいる」

とキリストは言っている。そういうところは、キリストはよく見ていらっしやるわけですね。大いに自ら自認していたパウロは一遍ひっくり返された。キリストは、

「なんぞ、我を迫害するか！ モーセではないぞ」

と。それでパウロはひっくり返されて、

「わが眼より鱗のごときもの落ちたり」

と、キリストの前に平伏した。三日三晩、目が見えず耳が聞こえずものが言えずというわけだ。あれは凄いよ。復活のキリストに撃たれて、パウロは完全に回身した。「かいしん」というのは回心と書くけれども、私は「回身」と書く。身を回す、全存在的にひっくり返ることです。それが本当の回身です。心だけではダメなんです。全存在的に自己義認からキリスト義認にひっくり返る。

「自分は何ものでもない」

と言って平伏す。平伏さなければ本当のことが始まらない。

聖書の研究者になったらダメですよ。聖書は身読しんどくするもので、

「聖書の世界の中に自分を投げ入れて、その聖書の中の人物に自分を一つにして読む」

ことが本当の読み方です。对象的に読んでいたらダメなんだ。聖書の読み方もそうですよ。

「これはどういう意味だ」

なんて、意味を考えているうちはダメです。エレミヤのところを読んだら、自分がエレミヤにならなくては。イザヤにならなくては。ダビデにならなくては。そういう読み方をしないとね。それは聖霊の力でできるんです。そして、エレミヤ以上、イザヤ以上の世界に入る。キリストの御霊の力で入っていく。旧約に新約の光を注ぎ込んでやる。

「我は光なり」

と、本当の光はキリストだけだからね。

●無即無限無量

そのキリストも実は光がない。神さまの光だ。全部、受け身です。受け身の存在が本当の存在です。だから、私は無即無限無量だと言っている。その受け身の場をつくってくださいなのが十字架です。十字架でゼロにされたから、聖霊の無限無量がくる。無即無限無量と



いうのは十字架、即、聖霊、ということ。十字架と聖霊は離すわけにはいかない。

無教会では「十字架、十字架」といって、私は十字架ばかり聞かされてしまったけれども、聖霊のことは出てこない。聖霊体験がないものだから。何か欠けていると思つた。特に無教会主義なんていつてイズムになつたらなおさら悪い。教会に対立して無教会なんて言つて、そんな対立したつてダメだよ。本当は、本当のエクレシア、教会です。キリストの群れ的一端だから。我々、武蔵野の幕屋の人たちはキリストのエクレシアの大事な一人びりです。

25 また問いて言う『なんじ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故バプテスマを施すか』

「かの預言者」とはエレミヤのこと。「どういふ権威でバプテスマを施すか。けしからんではないか」と。

26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』

「水にてバプテスマを施す」とは「これは悔改のバプテスマだ」ということ。

「大変なひとがいるぞ。私は先駆だけれども、私の後にやって来るかたは大変なひとだ。私はそのかたの靴の紐を解いたり結んだりするにも足らないようないやうがないやつだが、あの人は大変なひとなんだ。私の水のバプテスマなんていうものはただそれのお膳だてにすぎない。あの人は聖霊でバプテスマをするひとだ」と。イエスというひとは歴史を両断するようないやうなひとだからね。

28 これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。

「ヨルダンの向」とはヨルダンの東側のことです。イエスだつてまだ若いときは、ある群れの一人だつたけれども、その群れの中にいながら、キリストは全然それを超越したひとだつた。シナゴークで旧約の音信はみな聞いて、キリストはちゃんと知っている。キリストなんか一遍聞いたらもうそれを忘れないのだろうね。そして、それはみな自分に対する預言のあるものだから。旧約的な言葉も隠された預言なんだ。

●神の羔羊

29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。』

これは素晴らしい宣言だ。「世」というときは罪の世のことをいう。「羔」という字は素晴らしい字だ。ふつうの人は読めない。妙な字だね、羊を炎で焼く。羔はおいしいから。「神の羔羊」という言い方はやはりイザヤ書から来ている。イザヤ書40章11節です。



「10 みよ主エホバ能力ちからをもちて来りたまわん。賞賜たまものはその手にあり。はたらきの値はその前にあり。11 主は牧者のごとくその群をやしない、その臂かひなにて小羊をいただき、之をその懐中ふところにいれてたずさえ、乳をふくます者をやわからに導きたまわん。」(イザヤ40・10～11)

神さまがその臂にキリストをいただき、懐に入れてたずさええる。

「神の懐にいる子」

という言い方をヨハネ伝でしている。

「未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡ふところにいます独子ひとりごの神のみ之を躓あつむし給えり。」

(ヨハネ1・18)

我々はキリストの懐の中にいなければダメなわけだ。寝るときは、

「主さま、あなたの懐の中で眠ります」

と言つて寝たらいい。寝る時の祈りで、「み懐の中で寝かしてください」と。

宗教的な真理というものは非常に不思議なものです、全部、神秘的なものです。譬えてはない。霊的神秘的現実なんです。神秘とは大事なことです。本当の意味において最高の文学の世界は非常に神秘なんです。ゲーテの『ファウスト』にしる、ダンテの『神曲』にしる。宗教的な高さはもちろん『神曲』の方ですけれども、『ファウスト』のことを現世的聖書という言い方もあるくらいです。とにかくしかし、ゲーテはよく聖書をこなしていましたからね。漱石さんなんかを読むと足りない。そういう世界がないから。せいぜい、悟りだ。悟りくらいではダメなんです。蘆花のあるところは、いいところはあるけれども。何といったって、聖書というのは大変な本です。これはもつたいぶつて読む本ではない。聖書というのは燃えている本だ。火のような文字だから。キリストの光と愛と智慧で読むと、旧約でも何でも全部味がちがってくる。いわゆる学問的な、いわゆる研究的な読み方をしたらダメですよ、聖書は死んでしまう。ところが、「聖書研究会」なんて、何が研究かと言いたい。研究なんてのは全くご苦労さんなはなしだ。終いにはくたびれてしまう。私の言方はだいたい乱暴ですけども、これは本当なんです。

● 十字架・聖霊の現実

30 われかつて「わが後に来たる人あり、我にまされり、我より前まへにありし故なり」と云いしは、此の人なり。31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに躓あつむれんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり」32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鳩のごとく天より降くだりて、その上に止とどまり。」

キリストが洗礼のヨハネの所にやってきたら、ヨハネは、

「あなたは私から洗礼を受けるような人ではない」



「いやいや、今はいいんだ」

ところが、御霊が鳩のごとくキリストの上に降るのが見えた。

「これは大変なひとだ」

と。同じ洗礼を受けていても、次元が違う。だから、我々は十字架・聖霊の現実を本当に限りなく進んでいかななくてはいいかん。

「我に受くべきバプテスマあり。思い迫ることいかばかりぞや」

とキリストが言ったのは十字架のことです。

「十字架を通つたら、今度はお前たちに聖霊を降だすぞ」

と、キリストは約束しているんだ。ルカ伝12章49、50節は非常に大事なところですよ。

「我は火（聖霊）を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマ（十字架）あり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」

この十字架のバプテスマを通つたら、お前たちに聖霊を降だすからと。

われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」（ルカ12・49～51）

聖霊がやってくると、聖霊のないご連中とは言い争いになる。これは仕方がないと随分あからさまに書いてある。

32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。』

鳩というのはただ平和の象徴かと思っているけれども、聖霊の姿だと思わなくてはいいかん。

33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。34 われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

素晴らしいね。「或人」と書いてあるのはキリストです。クリスチャンというのはキリストの聖霊のバプテスマを受けなければいいかん。十字架の下で聖霊のバプテスマを受けなければ「キリスト者にあらず」と、パウロがロマ書8章9節で言っている。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。3 肉により弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4 これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。5 肉にしたがう者は肉の事をおもひ、霊にしたがう者は霊の事をおもう。6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。」（ロマ8・1～6）



「肉」というのは生来の人間のこと。生来の人間的な思いではダメだということです。
 「平安なり」

というのは大事な言葉です。平和ではない。平安というのは、神・キリストと私の関係が平安です。人間同士の関係は平和です。平安がないところに本当は平和はない。平安は縦の関係、平和は横の関係です。「平和、平和」なんて皆言っているけれども、平安という先の縦の関係がないところに平和なんてものはありはしない。それは偽りの平和だ。普通の平和運動なんてものは浅薄な偽りのものだ。どこまでも大事なのはこの縦の関係です。「神—キリスト—我」の関係です。

●神交

聖書の言葉は説明なんかしてない。これは全部宣言なんです。宣言、宣告、預言です。

「6 肉の念おもひは死なり。霊の念は生命なり、平安なり。7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8 また肉に居る者は神を悦よろこばすこと能わざるなり。」

人間本位の思いは神に逆らう。単なる民主主義ではダメ、人間的なものはダメだということ。9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

と、パウロがはつきり言っている。ロマ書8章9節は忘れないでくださいよ。

「キリストの御霊なき者はキリストチャンに非ず」

ということですよ。御霊なきキリストチャンがたくさんいるんだ、観念キリストチャンが。そんなものはキリストチャンではない。

10 若しキリスト汝らいまに在からざば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在る。」(ロマ8:6～10)

我々の自然的存在は罪によって死んだものだけれども、霊は義によりて生命にある。キリストの実存が義という。それが本当の生命に在る。キリストは本当の永遠の生命者です。

「死んでも死なない」

というんだ。我々は死なないですよ、向こう側に往くだけのはなしですよ。往生という。往きて生きるんです。

「小池先生は死んだ」

なんて言わないでくださいよ、

「小池先生は往生した」

と言ってくれなければ。死亡広告なんてものは出させないから、もし言うなら往生報告だ。霊的生命をいただいている者は死なない。御霊の生命をいただいているものは死なない。いわゆる信仰ではない。「しんこう」と書きたければ、神との交わりの「神交」です。「神」



はキリストです。

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」(ロマ8:9)
 とはい言葉だ。9節は非常に大事なところだ。

大事なところはサイドラインをしておきなさいよ。聖書がまっ白ではダメです。私は至るところにラインが引つ張つてある。特に新約聖書は大変だ。あるところは破れている。あなた方、本当に聖書を楽しんでいますか。勉強ではないよ、楽しんで身体で読まない。全存在で。読むとは「聖書の現実の中に入る」ことです。投身すること、投げ身することです。聖書の中に投げ身しなければ、本当は聖書を読んでいることにならない。「読む」という言葉が躓きだね、

「聖書を食べる」

とでも言った方がいい。日蓮が

「法華経を喰らえ」

と言った。食べるんだ。

親鸞だとか、日蓮だとか、ああいう第一級の坊さんは凄いよ。私は宗派根性はないから、本ものは本当に尊重する。彼らは烈々たる魂だからね。法然、親鸞、日蓮、道元、どれを読んでも楽しい。釈迦もびつくりしてしまうんだよ、日本にこんなのがいるかといって。

キリストの愛がいかに素晴らしいか。ロマ書8章の35節から語っているパウロの言葉は凄いい。

「³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。³⁶録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。」

キリストによって勝ち得て余りありという。

³⁸われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8・35～39)

パウロのこの言葉は凄いいね。パウロという人は本当にキリストの中に溶け込んでいるようなひとだ。いわゆる信仰ではない。キリストと一体一如になっている。一如ということは非常に大事なことです。「如」という字は「ごとし」という意味ではない。一に化せられている。一化しているということだ。

もう、烈々たる文字ですよ。これを読んでいて、身体が熱くなるような読み方をしなければダメなんです。

「あらゆる本の中のこの本、それは聖書だ」



とはゲーテの言葉です。さすがは大詩人ゲーテだ。それくらい彼は聖書を——彼は研究しない——本当に身読した。ダンテ、ゲーテ、『レ・ミゼラブル』を書いたユゴー。イギリスではブラウニング。若い人は英語、独語、仏語は読めるようにしなさいよ。そして、第一級のものを原語で読まなくては。トルストイだのドストエフスキーは、ロシア語は大変だけれども。いや、皆さん、日本語で結構ですから。眼光紙背に徹する。日本語の奥、ギリシヤ語やヘブライ語の奥の、神の言の響きを読む読み方をしないとね。そうすると、もう楽しくてしょうがない。

● 羔の怒

イザヤ書の「神の懐に入れた羔羊」、即ち神の懐の存在。だから、キリストのことを羔という。神の懐にいる存在です。

「羔の怒」という不思議な言葉がある。獅子が吼えるよりも、羔の怒が恐ろしい。黙示録にある。羔の怒が発せられたら、みな逃げようと思つたつて逃げられないぞと。

「第六の封印を解き給いし時、われ見しに、大なる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、¹³ 天の星は無花果の樹の大風に揺られて生後の果の落つるごとく地におち、¹⁴ 天は巻物を捲くごとく去りゆき、山と島とは悉くその処を移されたり。¹⁵ 地の王たち・大臣・将校・強き者・奴隸・自主の人みな洞と山の巖間とに匿れ、¹⁶ 山と巖とに對いて言う『請う我らの上に墮ちて、御座に坐したもう者の御顔より、羔羊の怒より、我らを隠せ。』¹⁷ そは御怒の大なる日既に來ればなり。誰か立つことを得ん』(黙示録 6・12～17)

また、旧約聖書の終りの方のマラキ書4章に、

「万軍のエホバいいたもう、視よ炉のごとくに焼くる日來らん。すべて驕慢者と悪をおこなう者は藁のごとくにならん。そのきたらんとする日、彼等を焼きつくして根も枝ものこらざらしめん。² されど我名をおそるる汝らには義の日いでて昇らん。その翼には醫す能をそなえん。汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん。³ またなんじらは悪人を踐つけん。即ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん。万軍のエホバこれを言ふ。」(マラキ 4・1～3)

とある。この世の歴史の終りのところだ。凄いことが書いてあるね。これは神さまの審判です。イエス・キリストの怒です。愛のキリストが怒られる。これは本当の愛の怒なんです。ただ憎しみではない。キリストの愛を拒んでいたご連中、逆らっていたご連中には「羔羊の怒」がくだされる。とにかく、聖書はよく読んで味わわなくてはね。

